

椅子に座ったまま伸びをして、大きなあくびをついた。時計を見ると、深夜一時を回ったところだった。

仕事があまりにも多くて家に持ち帰ってきたものの、パソコンの画面に表示された表はなかなか埋まらない。

慣れない徹夜作業のせいか、一時間ほど前から集中力が切れてきてしまった。今夜中に終わらせなければならぬ仕事だというのに、こういうときに限ってわたしの脳は追いついてきてくれない。

お腹から情けない音が鳴った。

思えば、帰ってきてから何も食べていない。ずっとパソコンや資料と睨めっこしていたせいで、夕飯のことをすっかり忘れていたのだ。

今から軽いものでも口に入れようか。小さなおにぎりとか、カップスープとか。

いや、わたしは今、ダイエット中なのだ。無念にも断り切れなかった、同僚たちからの海へのお誘いのために。

最近の間食もやめて、普段の食事の量にも気を付けるようになったおかげか、今のところ順調に体重は減りつつある。度々こうして訪れる「何か食べたい衝動」だって、炭酸水を飲んで無理やり空腹感を紛らわせてきたのだ。

それなのに、ここで食べたらたがが外れて今までの努力が泡になってしまいかもしれない。わたしは自身を奮い立たせるために首をぶるぶると振って、再び画面に向き合った。炭酸水を切らしている今、わたしは残り僅かな気合だけで、この空腹感と戦わなければならない。

しかし、しばらく経たないうちに、今度は激しい眠気に襲われた。もう駄目だ、さすがに無理。

脳を活性化してくれるような何か、何か刺激を、何でもいいから――。

その時、わたしは鞆の中に入ったままのある存在を思い出した。

職場で後輩の男の子にもらった、キャラメル。

これだったら、とわたしは無性で取り出して包み紙をはがし、その小さな固形物を口の中に放り入れた。

甘い。甘くて美味しい。「空腹は最高のスパイス」とはこのことなのかもしれない。それとも、禁忌を犯したような甘美な背徳感に、自分は酔っているのだろうか。

キャラメルが完全に溶けて無くなって、甘さの余韻とわずかな罪悪感に浸りながら、わたしは今度こそ気合いを入れて、キーボードを叩き始めた。

ふいに、キャラメルを渡されたときに後輩に言われた言葉を思い出した。

「先輩って、キャラメルみたいですよ。自分に厳しくて他人に甘い……ビタースイートっていうのかな。でも、このキャラメルは他のやつよりも甘いんですよ。食べると、自分にも優しくなれる気がするんです。だからおすすめ」

少女漫画みたいなセリフを言って、彼は爽やかに笑っていた。

あのときは軽く受け流したけれど、改めて脳内で再生するとくすりと笑みがこぼれた。

明日、ちゃんとお礼言わなきゃね。

よし、あともうちよつとだけ、頑張ろう。